家別人別帳よりみた近世中期以降の越前民家

その2・その家屋形式の地域分布と年代変化

正会員 山 田 弘 康*

前論文では、史料の概要、考察の方法、越前国の概況にふれた後、村落の規模、村落の階層構成、文書記載の家屋呼称の種類について考察を行った。

本論文では、文書記載の角部分家屋の呼称とその機能を検討した後、角屋の有無により区分した直屋型と角屋型の2種の家屋形式(家屋型)の地域分布とその年代変化について考察を行なう。さらに、直屋型と角屋型家屋を付属する土蔵・小屋等の別棟家屋の所有軒数により細分類を行ない(家屋構成の形式=家構型)、これら家構型の地域分布とその年代変化をみた後、各家構型と石高階層の関係を考察する。

2-1 角部分家屋の呼称とその機能

表2-1は、史料記載家屋呼称のうち、角部分と思われる家屋、および、これらと同機能の家屋の呼称をまとめた表である。表は、地域別に村毎にまとめられているが、福井地域の明石宮内知行分の蔵入百姓は、各村に数戸ずつの記録しかないで、同年の史料で、同じ家屋呼称をもつ村をまとめて、家屋呼称の集計を行った。

表にみられる家屋呼称は、「角屋」「座敷」「角仏間」「角水屋」「角馬屋」「馬屋」「水屋」「馬蔵」の8種である。このうち、「角屋」「角仏間」「角水屋」「角馬屋」の4種は、「角一」なる呼称から、「直屋」の「角部分」として付加された家屋と考えられるが、「座敷」「水屋」「馬屋」「馬蔵」の4種は、その呼称から、家屋形式を直接知ることはできない。以下、こ

表 2-1 角部分家屋の呼称種別

地域	和 正	西 正	村 名	角屋 軒数	座敷 軒数	角仏間 軒数	角水屋 軒数	水屋 軒数	角馬屋 軒数	馬屋 軒数	馬蔵 軒数	合計	高階層 軒数
坂井 地域	1 享保5	1720	高塚	6								6	25
	2 " 14	1729	後山	65	1							66	89
	3 " 14	1729	安沢	9								9	40
	4 延享4	1747	高塚	4								4	19
	5 文政3	1820	黒月	5	6							11	40
	6 " 3	1820	折戸									0	39
	7 天保6	1835	山竹田	1								1	28
	8 慶應1	1865	御蔵尾									0	17
	9 " 4	1868	杓									0	8
	10 " 4	1868	丘方									0	43
			小計	90	7	0	0	0	0	0	0	97	348
福井 地域	1 享保4	1719	志比界	5	1							6	26
	2 " 11	1726	岩倉(柳)		1		3		4			8	5
	3 " 11	1726	4村(柳)	6	1			1		5		13	16
	4 元文5	1740	3村(柳)	1				2		3		6	5
	5 延享2	1745	大屋									0	6
	6 " 3	1746	中野洲	4	1			3		10		18	19
	7 " 3	1746	2村(柳)					1		1		2	2
	8 明和1	1764	岩倉(柳)		1		1		1			3	8
	9 明和1	1764	8村(柳)	16				15		12	2	47	51
	10 文化5	1808	中郷	8						8		16	25
	11 文久3	1863	天池									0	24
	12 慶應1	1865	北野下									0	30
			小計	40	5	0	4	22	5	39	2	116	217
丹生 地域	1 元文5	1740	杉谷	25	1			1				27	46
	2 文化7	1810	岩倉			3	3		8			14	14
	3 文久2	1862	大森	1				12		12		25	24
	4 慶應1	1865	山田	4								4	5
			小計	30	1	3	3	13	8	12	0	70	89
武生 地域	1 寛政5	1793	二階堂	3								3	7
	2 " 9	1797	南山山	5				15				20	15
	3 " 9	1797	下平吹	13	1			17				31	21
	4 文化4	1817	国兼	6	1			11				18	28
	5 文政6	1823	下平吹	8	1			17				26	20
	6 " 9	1826	二階堂	2								2	6
	7 " 9	1826	西番	4				9		7		20	15
	8 天保6	1835	南山山	9				12				21	15
	9 " 12	1841	下平吹	8	1			10				19	17
	10 " 12	1841	今宿					1				1	19
	11 嘉永7	1854	北小山	3	3			18				24	20
	12 安政6	1859	今宿					1				1	19
			小計	61	7	0	0	111	0	7	0	186	202

れら8種の家屋呼称について、「座敷」「水屋」「馬屋」「馬蔵」の家屋形式がどうであったか、角部分の家屋はどう呼称されていたか、「角屋」の家屋機能は何であったか、各家屋呼称の地域分布はどうであったかについて考察をおこなう。

表2-1によると、北部の坂井地域では「角屋」と「座敷」の2種、福井と丹生地域では7種、南部の武生地域では4種の家屋呼称がみられる。坂井地域は、7種の家

* 横浜国立大学工学部講師

(昭和49年12月6日稿受理・討論期限昭和51年4月末日)

屋呼称がみられる福井地域と九頭竜川をへだてて接する安沢村でさえ、「角屋」の呼称しかみられない。福井地域は、「角仏間」をのぞく7種の家屋呼称が存在し、「馬蔵」の呼称をもつ唯一の地域でもある。「馬蔵」は、明和元年(1764)の明智知行分の徳光村にみられ、2軒の「馬蔵」のうち、1軒は、「馬屋」をもつ百姓が同時に所有している。「馬屋」と「馬蔵」は、その呼称から考えて、同一機能の家屋と思われるが、この村では、この2種の家屋は区別して呼称されている。この呼称の区別は、家屋機能ではなく、「角形式」と「独立形式」といった家屋形式、または、「小屋」と「土蔵」の差に近い家屋の質によるものと思われ、「馬蔵」は、「蔵」の呼称をもつので、「別棟独立形式」の「土蔵」に近い作りをもった家屋と考えられる。この福井地域で、「水屋」または「馬屋」の呼称のみられる村は、延25村中、19村に及ぶが、この19村のうち17村には、同時に、「角屋」の呼称がみられる。すなわち、「角屋」と「水屋」「馬屋」の3種の家屋呼称は、同時にみられることが多く、呼称分布も一致することが多い。また、福井地域内の「角水屋」「角馬屋」の呼称は、岩倉村のみにみられ、同村に、「座敷」の呼称はみられるが、「角屋」「水屋」「馬屋」の呼称は記録されていない。「座敷」をのぞくと、家屋機能と形態を同時に意味する呼称のみが存在し、どちらかしか意味しない家屋呼称は存在しない。すなわち、この地域では、「角水屋」と「水屋」、「角馬屋」と「馬屋」といった家屋呼称が同一村でまざっている村はみられない。地域全体としての「角水屋」と「水屋」の呼称比率は4:24、「角馬屋」と「馬屋」の比率は5:39で、いずれも、「水屋」「馬屋」の呼称軒数のほうが、他の6~8倍も多い。

丹生地域は、福井地域と同じく、「角水屋」「角馬屋」がみられ、「馬蔵」はないが、「角仏間」なる呼称がみられ、7種の呼称が存在している。「角仏間」がみられる岩倉村は、「角水屋」「角馬屋」の呼称がみられ、「角屋」「座敷」「水屋」「馬屋」の呼称はみられない。福井地域の場合と同じく、「角水屋」「角馬屋」は「水屋」「馬屋」「角屋」の呼称と同一村に存在することはない。丹生地域で、「角屋」の呼称のある村は、4村中3村で、うち2村には「水屋」「馬屋」がみられ、「角屋」「水屋」「馬屋」が共存している。「角水屋」と「水屋」、「角馬屋」と「馬屋」の呼称軒数は、それぞれ3:13と8:12で、「水屋」「馬屋」のほうが、他の4~1.5倍も多い。丹生地域の「座敷」呼称は1例のみである。「座敷」を所有する百姓は、「長屋門」その他多くの家屋を所有し、「渡り廊下」と思われる「廊下」の呼称が「座敷」とともに記録されているので、この「座敷」は角形式でなく、渡り廊下で「直屋」とつながられた独立形式の家屋と思われる。これらから考えると、「廊下」と並記されていない

他の地方の「座敷」は、その性格からみて、「角座敷」と考えるほうが自然と思われる。

南部の武生地域の家屋呼称は、「座敷」「角屋」「水屋」「馬屋」の4種で、「角仏間」「角水屋」「角馬屋」の呼称はみられない。「角屋」と「水屋」の2種の呼称は、武生地域の12村中10村にみられ、「座敷」は4村、「馬屋」は、わずか1村にみられるにすぎない。「水屋」と「馬屋」の呼称軒数をくらべると、「水屋」が合計111軒あるのに、「馬屋」は7軒で、「水屋」は「馬屋」の16倍近い軒数である。他地域の場合、福井地域では、「馬屋」は「水屋」の2倍弱で、「馬屋」が多く、丹生地域では「水屋」は「馬屋」とほぼ同数で、「水屋」が1軒多かった。つぎに、「角屋」と「水屋」「馬屋」の関係をみると、「角屋」が存在する村では、同時に、「水屋」を所有することが多く、「馬屋」のみられる村では、「角屋」「水屋」「馬屋」が共存している。これは、福井地域・丹生地域と同じ現象となっている。この事実から考えると、「角屋」が「水屋」「馬屋」と同じ家屋形態と機能をもつなら、別の呼称で区別されることはないと思われるので、「角屋」は「水屋」「馬屋」と別の機能か、別の形態をもつ角部分家屋と考えられよう。「角屋」と「座敷」についても同様の考察を行なうと、越前の4地域とも、「角屋」と「座敷」を同時に記録する百姓や村がみられるので、この2種の家屋呼称は、別種の家屋を意味すると思われる。特に、「座敷」を「角座敷」とすると、「角屋」は「座敷」でない、別種の角部分家屋の呼称となる。

以上、各地域の角部分、または、これと同機能の家屋呼称についての検討事項を整理すると次のようになる。

- 1) 九頭竜川北岸の坂井地域は、「角屋」と「座敷」の2種の家屋呼称しかみられず、南岸の3地域と相違し、角部分と思われる家屋呼称は少ない。
- 2) 南岸の3地域は、「角屋」「座敷」「水屋」「馬屋」の4種の家屋呼称を共通にもつ。
- 3) 3地域のうち、丹生地域と福井地域は、4種の呼称の他に、「角水屋」「角馬屋」をもち、6種の呼称を共通とする。この他、丹生地域には、「角仏間」がみられ、7種の呼称が存在する。
- 4) 表2-1の8種の家屋呼称のうち、「馬蔵」は角形式ではなく、独立形式の家屋と思われる。
- 5) 「座敷」は、「廊下」とともに記録されている例をのぞくと、その機能から別棟の独立形式の家屋とは思われず、「直屋」の「角座敷」を意味すると思われる。
- 6) 「水屋」「馬屋」の呼称をもつ村は、「角屋」の呼称をもつことが多く、同じ百姓でこの3種の家屋呼称をもつ例があることから、家屋形態が同じ場合、「角屋」は「水屋」「馬屋」と別の機能の家屋と思われる。

- 7) 「座敷」と「角屋」は、同時に所有する百姓や村がみられるので、「角屋」は、「座敷」と別の性格をもつ家屋と思われる。
- 8) 「角水屋」「角馬屋」のある村には、「水屋」「馬屋」の呼称はみられない。
- 9) 「水屋」と「馬屋」の呼称軒数は、「角水屋」「角馬屋」の呼称軒数にくらべ、福井地域で 6~8 倍、丹生地域で 1.5~4 倍も多い。
- 10) 「水屋」と「馬屋」の呼称軒数は、福井地域が 22 : 39, 丹生地域が 13 : 12, 武生地域が 111 : 7 で、南部ほど「水屋」が多い。

つぎに、「家別人別帳」より得られた上記の事項とともに、福井県民家の遺構調査(注-1)の結果を加え、「水屋」「馬屋」の呼称が角部分家屋を意味していたか、また、「角屋」の機能・性格がなんであったかを、さらに検討してみよう。

表 2-2 遺構よりみた「ツノヤ」(角部分家屋)の型

福井県の民家の地域区分	平	入	平面形式	ツノヤ			本館の地域区分
				馬屋	台所	座敷	
越前Ⅰ型(南越)	平	入	表側(台所・馬屋)と、奥に板敷・座敷をとり、ツノヤを発達		前面(板敷)	背面(座敷)	武生地域 丹生地域
越前Ⅱ型(大野・金沢・越前)	平	入	前部が木工工の大きな柱、後半が板敷・座敷をとり、ツノヤを発達	側面(板敷)	側面(板敷)	背面(座敷)あり	福井地域 一部(丹生地域)
越前Ⅲ型(奥北越)	平	入	(1)4/4のヒロマ型			背面(座敷)あり	坂井地域

(注)「福井県の民家」より作成。

「福井県の民家」で報告されている角部分家屋の遺構種別は、表 2-2 にみられるように、「座敷(仏間・部屋)」「水屋(台所)」「馬屋」で、その地域分布は、坂井地域が「座敷」、福井地域と丹生地域が「座敷」「水屋」「馬屋」、武生地域が「座敷」「水屋」となっている。別棟の独立形式をもつ「座敷」「水屋」「馬屋」について、報告書はふれていないので、必ずしも、別棟型のこれら家屋がなかったと断定できないが、地域によって、これら種別の角部分家屋がよく発達し、広くみられることを報告している(注-2)。一方、表 2-1 にみられる「水屋」「馬屋」を角部分家屋でないとすると、越前全域で、角部分としての「角水屋」「角馬屋」は、わずか 2 村(延 3 村)にしかみられないこととなる。また、「角屋」と呼称されている家屋の 1 部が「角水屋」「角馬屋」であったとすると、「座敷(仏間・部屋)」の存在を考えなければならず、高持上層の遺構は角部分としての「座敷」「水屋」「馬屋」を同時に所有する例が多いことを考えると、一般高持層で角部分をもつ戸数は、きわめて限られたものとならざるをえない。すなわち、表 2-1 の福井・丹生・武生地域の延高持戸数 508 戸に対し、「座敷」「角屋」「角仏間」「角水屋」「角馬屋」の延数は 167 軒で、各戸が 1 軒の角部分家屋しかもたないとしても、全体で 32.9%

の角屋型家屋しかみられないことになる。特に、「福井県の民家」で角屋型家屋がよく発達し、広くみられるとしている武生地域(注-3)では、延戸数 202 戸に対し、「座敷」「角屋」を合せて 68 軒の角部分家屋(33.7%)しかみられないことになり、一戸で数軒の角部分家屋をもつとすると、角屋型家屋の比率はさらに減少する。また、「角屋」の 1 部が、「角水屋」「角馬屋」であったとすると、同時に記録されている「水屋」「馬屋」は別棟独立形式と考えざるをえず、居住家族数と飼育牛馬数に対して、「水屋」「馬屋」数が多すぎる百姓も生じる。そして、「座敷」と「角屋」のみを角部分家屋とし、「水屋」「馬屋」を独立形式とすると、「家別人別帳」の越前の角屋型家屋は、1~2 軒の角部分家屋しかもたないことになり、江戸期の遺構にみられる 3~4 軒の角部分をもつ民家は、すべて、「家別人別帳」作成後に建築されたものと考えざるをえない。これらから考えると、「水屋」「馬屋」と呼称されている家屋は、1 部の村でみられた「角水屋」「角馬屋」の別呼称の角部分家屋と考えるほうがよく、民家遺構の実状とも合致すると思われる。「角水屋」「角馬屋」のある村に、「水屋」「馬屋」の呼称があれば、これらを独立形式の家屋呼称と考えることもできるが、こうした例がないことから、「水屋」「馬屋」は角形式家屋の呼称と考えるほうがよいだろう。

つぎに、「角屋」の機能・性格について考察しよう。「水屋」「馬屋」の家屋形態についての上記の考察と前述の検討事項の(6)と(7)から、「角屋」は「座敷」「水屋」「馬屋」とは相違した機能と性格をもつ居住用の角部分家屋であったと考えられる。「座敷」や「水屋」でない居住用角部分とすると、「角屋」は「仏間」または「寝間」であった可能性が強い。「角仏間」なる呼称は、「角水屋」「角馬屋」の呼称がみられた丹生地域の岩倉村に存在している。また、「座敷」「水屋」「馬屋」の呼称がみられない坂井地域の高塚村と安沢村の「角屋」には、「板敷」の記録が高持上層にみられ、この「板敷」の記録からみて、「角屋」は「座敷」ではなく、「板敷」または「土座」その他の床をもつ「仏間」「寝間」といった居住用の角部分と考えてよいだろう(注-4)。

以上の考察をまとめると、次のようになる。

- 1) 角部分家屋の呼称は、「角屋」「座敷」「角仏間」「角水屋」「角馬屋」「水屋」「馬屋」の 7 種である。
- 2) 角部分家屋としての「座敷」「水屋」「馬屋」は、1 部の村落をのぞき、「座敷」「水屋」「馬屋」と呼称されていた。
- 3) 「座敷」をのぞく居住用の角部分家屋は、「角屋」と呼称され、「仏間」「寝間」として使用されていたと思われる。
- 4) 角部分家屋呼称の地域分布は、坂井地域が「角屋」「座敷」の 2 種、福井地域が「角屋」「座敷」「水屋」「馬

屋」「角水屋」「角馬屋」の6種、丹生地域がこれらに「角仏間」を加えて7種、武生地域は「角屋」「座敷」「水屋」「馬屋」の4種である。

- 5) 坂井地域は、越前4地域にみられる「座敷」「角屋」といった居住用の角部分家屋のみであるが、九頭竜川南岸の他の3地域は、これに「水屋」「馬屋」が加わる。福井地域の「馬屋」は、「水屋」が2倍弱多く、丹生地域は「馬屋」「水屋」がほぼ同数、武生地域は隣接2地域とことなり、逆に「水屋」が圧倒的に多い。すなわち、「水屋」の比率は南部ほど増加している。

2-2 直屋型と角屋型家屋の地域分布とその年代変化

図2-1は、越前民家を、主屋部分が直屋のみからなる直屋型家屋と直屋に角部分家屋が付加された角屋型家屋の2種に区分し、この2種の家屋形式の地域別構成比率の年代別変化をまとめた図である。この図は、高持層の家屋形式のみをまとめたもので、無高層は史料により家屋記録の欠落がみられるので、図から除外してある。しかし、記録が残る無高層の家屋は、全て直屋のみで、越前の村戸数の半数近くをしめる無高戸数（雑家・乞喰・婦等）を加えると、直屋型家屋の比率は、この図よりかなり高くなる。

まず、越前北部の坂井地域の家屋形式をみると、1701～25年の直屋型家屋は76%、角屋型家屋は24%であったが、1726～50年には直屋型家屋が62.5%と減少し、角屋型家屋が37.5%と前年代より50%以上も多くなっている。1751～75年と1776～1800年は史料がなく不明であるが、1801～25年は直屋型家屋が91%と増加し、角屋型家屋は9%に激減する。1826～50年は直屋型家屋が96.5%、角屋型家屋が3.5%となり、1851～68年には角屋型家屋が消失し、直屋型家屋のみとなる。

福井地域は、隣接する坂井地域と似た年代変化をしめている。1701～25年は直屋型家屋が80.5%、角屋型家屋が19.5%であったが、1726～50年には角屋型家屋が51%と急増する。1751～75年は角屋型家屋が49%、

図2-1 地域別にみた直屋型と角屋型家屋比率の年代別変化（高持）

1801～25年は48%と変化はなく、1726～1825年の100年間の直屋型家屋と角屋型家屋の割合は相半ばしている。ところが、1851～68年には角屋型家屋は消失し、家屋形式は直屋型のみとなっている。

丹生地域は北部の坂井・福井地域と相違し、各年代とも角屋型家屋が半数をこえ、幕末に、角屋型家屋が逆に増加するという現象を示している。この地域の角屋型家屋は、1726～50年に56.5%、1801～25年に57%、1851～68年に69%で角屋型家屋の多い地域である。

南部の武生地域は1775年以前の史料がなく、1776年以降しかわからない。この地域は、角屋型家屋が特に多く、1776～1800年は81.5%、1801～25年は64.5%、1826～50年は57%、1851～68年は49%であった。直屋型家屋は、1776～1800年に18.5%にすぎなかったが、幕末の1851～68年になり51%と半数をこえる。幕末に角屋型家屋が減少する傾向は、北部地域と同様であるが、角屋型家屋の割合が高い点では、丹生地域に近い。

越前の高持層の家屋型の地域分布とその年代変化は、

- 1) 北部の福井と坂井地域では直屋型家屋が多く、どの年代も角屋型家屋は50%を越えることはなかったが、南部の武生と丹生地域では角屋型家屋が50%をこえている。
- 2) 年代別変化をみると、1700年初頭から中期にかけて坂井と福井地域の角屋型家屋は増加しているが、1800年代に入ると、坂井・福井・武生地域の角屋型家屋は減少する。特に、幕末の坂井と福井地域では角屋型家屋が消失し、直屋型家屋のみとなる。

といった傾向をもつ。図2-1で、福井の角屋型家屋が幕末に急に消えていること、丹生地域で角屋型家屋が年代と共に増加していることは、家屋の寿命や他地域の角屋型家屋の減少傾向からみて説明しにくい。この理由として、幕末の福井地域の史料が前年代とことなり、角屋型家屋の少ない坂井地域と接する九頭竜川畔の村のものであったこと、幕末の丹生地域の史料は高持層の平均石高が25石/戸と高く、上層階層の多い大森林を含むため(注5)、角屋型家構が多くなったことが、こうした現象を生み出した理由とも考えられる。

2-3 家構型の種別とその地域分布・年代変化

図2-2から図2-5は、主屋部分の家屋型である直屋型家屋と角屋型家屋を、さらに別棟家屋である小屋・土蔵等の所有軒数によって、いくつかの家屋構成の形式(家構型)に細分類し、その家構型の地域別構成比率の年代別変化をしめた図である。これらの図は、家屋型の図2-1と同様に、高持層の家構型のみを整理したもので、無高層分は含んでいない。家構型の種別は、直屋型家屋と角屋型家屋のそれぞれを、土蔵や小屋等の別棟家屋を所有しない(直+0)型と(角+0)型、1軒所有する(直

図 2-2 坂井地域における家構型比率の年代別変化 (高持層)

図 2-3 福井地域における家構型比率の年代別変化 (高持層)

図 2-4 丹生地域における家構型比率の年代別変化 (高持層)

図 2-5 武生地域における家構型比率の年代別変化 (高持層)

+1) 型と (角+1) 型, 2 軒以上所有する (直+2) 型と (角+2) 型の合計 6 型式に区分した。

まず, 越前北部の坂井地域の家構型からみよう。別棟家屋のない (直+0) 型は, 1701~25 年に 76% であったが, 1726~50 年は 61% と減少している。しかし, 1800 年代は 70% 前後で推移し, 全年代を通じ変化は比較的少ない。別棟家屋のある (直+1) 型と (直+2) 型の合計は, 1701~25 年が 0%, 1726~50 年が 1% であったが, 1801~25 年は 23%, 1826 年以降は 29% で幕末に近づくにつれ, その割合は増加している。特に, 幕末の (直+1) 型は 20% にもなり, この地域における直屋型家屋の増加は, 主に, (直+1) 型の増加によっていることがわかる。1701~25 年の坂井地域の角屋型家屋は, 3 型式を合計すると 24% であったが, うち別棟家屋のない (角+0) 型が半数の 12% をしめている。1726~50 年は (角+0) 型が 24% と倍増しているが, (角+1) 型と (角+2) 型の合計は 14% で, ほとんど増加していない。1801~25 年は角屋型家屋の合計が 9% と減少しているが, 特に, (角+0) 型が 1.5% で減が大きい。以後, 幕末になると, 角屋型家屋は消失する。このように, 北部の坂井地域の家構型は, (直+0) 型の比率が 1726 年以降ほとんど変化せず, 別棟家屋をもつ直屋型家屋と角屋型家屋の間で家構型比率の交替が生じていることがわかる。

福井地域の家構型の変化は, (直+0) 型が 1701~25 年に 73.5%, 1726~50 年に 43.5%, 1751~75 年に 49%, 1801~25 年に 44%, 幕末は 53.5% で, 1725 年以前と 1726 年以降に大きな差がみられるが, 1726 年以降の (直+0) 型の比率はほぼ横ばいで変化はない。(直+1) 型は, 18 世紀初頭, 7.5% みられ, 以後 1801~25 年までその比はほとんど変化しないが, 幕末に 41% へ急増している。(直+2) 型は幕末に 5.5% みられるだけである。角屋型家屋は, 1701~25 年から 1726~50 年にかけて 32% も増加している。その増加の大部分は (角+0) 型の 24.5% の増分であり, 以後, 1801~25 年まで (角+0) 型の比率はほとんど変化しない。別棟家屋をもつ (角+1) 型と (角+2) 型の比率は, 合計 15% 前後で, 1825 年まで変化はないが (角+2) 型は 1700 年代前半にみられるのみである。

これら坂井と福井の 2 地域の家構型の年代変化は, 1701~25 年から 1726~50 年にかけて, 角屋型家屋の増加となってみられる。この両地域は, 角屋型家屋増加の主要部分が (角+0) 型であること, (直+0) 型の割合は 1726~50 年以降ほとんど変化していないこと, 1700 年代の別棟家屋をもつ直屋型家屋の割合が小さいこと, 幕末における直屋型家屋の増加は, 主に, 別棟家屋をもつ直屋型家屋の増により生じていること等の共通点をもっている。

丹生地域の家構型は、1726 年以降しかわからないが、各年代とも、角屋型が 55% 以上という高い比率をしめている。1726～50 年は、別棟家屋のない（直+0）型と（角+0）型が合計 84.5% も存在し、別棟家屋のある家構型は 16.5% にすぎない。1801～25 年は別棟家屋のない家構型が 71.5% と 13% 減となっている。この比率変化は、主に、（角+0）型の 17% 減少、（角+2）型の 19.5% 増により生じている。1851～68 年は、別棟家屋のない（直+0）型と（角+0）型が減少し、合計で 27.5% となっている。別棟家屋のある家構型は、いずれも増加し、特に、（直+1）型と（角+1）型の増が大きい。丹生地域の家構型の年代変化は、別棟家屋のない家構型が減少し、別棟家屋のある家構型が増加している点、特に、別棟家屋を 1 軒もつ家構型の増加が著しく見られる点、福井・坂井地域とことなる。

武生地域の家構型は、直屋型家屋が 1776～1800 年の 19.5% から 1851～68 年の 51% と増加している。この増加は 1800 年前後に（直+0）型の増により生じ、1826 年以降は（直+1）型の増加により生じている。このためか、（直+0）型は一時増加する

が、全体としてその比率は横ばいである。角屋型家屋は、年代とともに、その比率を減じているが、これは主に（角+0）型と（角+1）型の減少により生じ、（角+2）型はむしろ増加している。

以上の越前の家構型の年代変化の傾向をまとめると、

- 1) 丹生地域を除く、坂井・福井・武生地域の（直+0）型の比率は、1700 年代中期以降はほとんど変化せず、坂井地域は 60～70%、福井地域は 55～65%、武生地域は 15～30% の分布域の中にある。

- 2) 坂井と福井地域において、1700 年代の直屋型家屋は別棟家屋のない（直+0）型が大部分をしめるが、角屋型家屋は別棟家屋のない（角+0）型が、半分以下の年代もあり、別棟家屋のある家構型の比率が高い。

- 3) 坂井と福井地域において、角屋型家屋は 1700 年代前半に急増するが、これは（直+0）型の減少、（角+0）型の増加という現象により生じてい

る。

- 4) 幕末に近づくにつれ、各地域とも、別棟家屋のない家構型が減少し、別棟家屋のある家構型が増加している。特に、（直+1）型の増加は著しい。

- 5) 幕末の坂井と福井地域は直屋型家屋しか見られないが、これは角屋型家屋が別棟家屋のある直屋型家屋へ移行したような現象により生じている。

となる。

2-4 家構型に反映する階層性

表 2-3 から表 2-6 は、各家構型とその家構型を最も多く所有する高持階層との関連をみた表である。

表 2-3 により北部の坂井地域をみると、1701～25 年の直屋型家屋は（直+0）型のみで ～5 石層に多くみられるが、～0 石層及び 10 石以上層も使用し、主に 20 石以下の階層にみられる家構型である。他の家構型は角屋型家屋のみで 20 石以上の階層が多く使用し、（角+0）型は ～20 石層、（角+1）型は ～40 石層、（角+2）型は 60 石以上層に多くみられる。1726～50 年は角屋型家屋が前年代より 5 割以上も増加し、別棟家屋のない（角

表 2-3 坂井地域における家構型と階層の関係

NO.	家構型	1701～1725 最頻階層戸数	1726～1750 最頻階層戸数	1751～1775 最頻階層戸数	1776～1800 最頻階層戸数	1801～1825 最頻階層戸数	1826～1850 最頻階層戸数	1851～1868 最頻階層戸数
1	(直+0)	～5石 19 9P 96%	～0石 90 6P 61%			～5石 53 18P 68%	～0石 19 11P 68%	～0石 49 25P 71%
2	(直+1)	0	0			～20石 13 4P 17%	～5石 6 5P 21%	～20石 14 7P 20%
3	(直+2)	0	～100石 1 1P 0.7%			～60石 5 2P 6%	～10石 2 2P 7%	～40石 6 6P 9%
4	(角+0)	～20石 3 2P 12%	～10石 35 12P 24%			～5石 1 1P 1%	0	0
5	(角+1)	～40石 1 1P 4%	～20石 11 6P 7.5%			～5石 2 2P 3%	0	0
6	(角+2)	～60石 2 2P 8%	～20石 10 3P 7%			～20石 4 4P 5%	～20石 1 1P 4%	0
7	高持戸数	25	147	0	0	78	28	69
8	村数	1	3			2	1	3
9	備考	座敷なし	(直+2)～100石 1P	史料なし	史料なし	(直+1)～5石 2P (直+2)～20石 4P	座敷なし	座敷なし

表 2-4 福井地域における家構型と階層の関係

NO.	家構型	1701～1725 最頻階層戸数	1726～1750 最頻階層戸数	1751～1775 最頻階層戸数	1776～1800 最頻階層戸数	1801～1825 最頻階層戸数	1826～1850 最頻階層戸数	1851～1868 最頻階層戸数
1	(直+0)	高持 19 73%	～5石 23 13P 43%	～10石 29 11P 49%		～5石 11 8P 44%		～10石 29 11P 54%
2	(直+1)	家末 2 2P 8%	～5石 3 3P 6%	～10石 1 1P 2%		～10石 2 1P 8%		～20石 22 10P 41%
3	(直+2)	0	0	0		0		～40石 3 1P 6%
4	(角+0)	高持 2 8%	～10石 17 8P 32%	～20石 21 7P 36%		～20石 8 4P 32%		0
5	(角+1)	家末 2 2P 8%	～20石 8 3P 15%	～10石 8 5P 14%		～20石 4 4P 16%		0
6	(角+2)	家末 1 1P 4%	～20石 2 1P 4%	0		0		0
7	高持戸数	26	53	59	0	25	0	54
8	村数	1	12	9		1		2
9	備考		(直+1)～40石 1P (直+2)～20石 1P	(直+1)～20石 1P	史料なし	座敷なし	史料なし	座敷なし

+0) 型がふえ、この家構型を ~10 石層が使用している。前年代より角屋型家屋を使用する階層は下層へひろがっている。このため、(直+0) 型は ~0 石層を中心に ~5 石層まで、(角+0) 型は ~10 石層、(角+1) 型は ~20 石層、(角+2) 型は ~20 石層及び 40 石以上層に多くみられる。1801~25 年は直屋型家屋が 91% と大多数をしめ、別棟家屋のある直屋型家屋も見られるようになり、直屋型家屋が各階層に広く用いられている。(直+0) 型は ~5 石層、(直+1) 型は ~20 石層、(直+2) 型は ~60 石層を中心に用いられている。角屋型家屋のうち、別棟家屋をもつ家構型は座敷をもつが、必ずしも石高の高い階層というわけではなく、村方 3 役層に多く用いられている。

1826 年以降は直屋型家屋がさらに増加し、幕末には角屋型はみられなくなる。家構型と階層との関係は前年代の傾向と類似し、上層・中層・下層の順に (直+2) 型・(直+1) 型・(直+0) 型が用いられている。1826~50 年に 1 例みられる角屋型家屋は、(角+2) 型で村内の最大石高の百姓が所有している。坂井地域では、1700 年代、

中間以上の階層で持高の順に別棟家屋の多い角屋型家屋がみられるが、1800 年代に入ると、角屋型家屋は少数となり、持高ではなく庄屋等の特定身分層に多く用いられている。

つぎに、福井地域の場合をみよう。1701~25 年は高持百姓の持高が 8.71 石均等で、百姓持高による階層区分ができないので、その「家来」人数(譜代下人か)によりその階層性をみよう。「家来」をもつ百姓は全て別棟家屋のある家構型を所有し、(直+1) 型・(角+1) 型・(角+2) 型の順に「家来」人数が多い。特に、(角+2) 型をもつ百姓は、7 人の「家来」をもち、座敷をも所有している。1726~1825 年の 100 年間は角屋型家屋が 50% 前後みられる年代である。この 100 年間の家構型と階層の関係は、各年代とも類似している。直屋型家屋は (直+0) 型と (直+1) 型がみられ、いずれも 10 石以下層に多くみられる。角屋型家屋は 10 石以上層にみられ、別棟家屋のある角屋型家屋は村内の最大持高の百姓が所有している。1726~50 年の直屋型家屋は、(直+1) 型を含め 10 石以下の高持下層に限定されていたが、

以後の年代は ~10 石層の一部にもみられ、年代が下るにつれ利用階層は広がる傾向がある。この年代の座敷は別棟家屋のある角屋型家屋のみに見られ、持高最大の百姓が所有している。1851~68 年の家構型は、直屋型家屋のみとなり、同年代の坂井地域と同じく、別棟家屋の軒数が階層差を示している。

丹生地域は、どの年代も角屋型家屋が 55% 以上みられる地域である。1726~50 年と 1801~25 年は、直屋型家屋は 20 石以下の階層、角屋型家屋は 20 石以上の階層に多くみられ、同年代の福井と似ている。それぞれ、別棟家屋軒数が多くなるにつれ、その利用階層も高くなっている。1851~68 年は直屋型家屋が 31% と減少するが、直屋型・角屋型家屋とも各階層に広く利用されている。しかし、直屋型家屋は別棟家屋のない家構型(直+0)が多く、角屋型家屋は別棟家屋のある家構型が多いので、下層では直屋型家屋が多く、中・上層では角屋型家屋が多くみられる。この地域で、座敷の記載のみみられる年代は 1801~25

表 2-5 丹生地域における家構型と階層の関係

NO.	家構型	1701~1725	1726~1750	1751~1775	1776~1800	1801~1825	1826~1850	1851~1868
		最階層戸数	最階層戸数	最階層戸数	最階層戸数	最階層戸数	最階層戸数	最階層戸数
1	(直+0)		~5石 18 8F 39%			~10石 6 4F 43%		~10石 5 3F 17%
2	(直+1)		~10石 2 2F 4%			0		~20石 3 1F 10%
3	(直+2)		0			0		~20石 1 1F 4%
4	(角+0)		~10石 21 10F 46%			~10石 4 3F 29%		~10石 3 2F 10%
5	(角+1)		~20石 4 2F 9%			~20石 1 1F 7%		~10石 8 6F 28%
6	(角+2)		~20石 1 1F 2%			~40石 3 2F 21%		~20石 9 7F 31%
7	高持戸数	0	46	0	0	14	0	29
8	村数		1			1		2
9	備考	史料なし	座敷なし	史料なし	史料なし	(座+1)・20石 1F (座+2)・40石 2F	史料なし	座敷なし

表 2-6 武生地域における家構型と階層の関係

NO.	家構型	1701~1725	1726~1750	1751~1775	1776~1800	1801~1825	1826~1850	1851~1868
		最階層戸数	最階層戸数	最階層戸数	最階層戸数	最階層戸数	最階層戸数	最階層戸数
1	(直+0)				~5石 6 3F 14%	~10石 14 8F 29%	~5石 19 8F 26%	~10石 7 3F 18%
2	(直+1)				~5石 2 2F 5%	~10石 3 2F 6%	~20石 11 7F 15%	~10石 12 5F 31%
3	(直+2)				0	0	~10石 1 1F 1%	~40石 1 1F 3%
4	(角+0)				~10石 11 5F 26%	~10石 11 4F 23%	~10石 6 2F 8%	~5石 5 2F 13%
5	(角+1)				~10石 23 11F 54%	~20石 19 17F 40%	~10石 32 12F 44%	~5石 10 4F 26%
6	(角+2)				~60石 1 1F 2%	~100石 1 1F 2%	~60石 3 3F 4%	~100石 4 2F 10%
7	高持戸数	0	0	0	43	48	72	39
8	村数				3	2	5	2
9	備考	史料なし	史料なし	史料なし	(座+1)・~60石 1F (座+2)・~100石 1F	(座+1)・~60石 1F (座+2)・~100石 1F	(座+1)・~40石 1F (座+2)・40~100石	3F

年のみであるが、座敷をもつ百姓は村内の大高持で、いずれも別棟家屋のある角屋型家屋を所有している。

武生地域は、角屋型家屋が 81.5% から 48.5% と幕末に近づくにつれ、その比率を低下させているが、角屋型家屋が越前で最も多くみられる地域である。1776～1800 年は、直屋型家屋が 18.5% しかみられないためか、直屋型家屋は 10 石以下層にかぎられ、角屋型家屋は中・上層ばかりでなく、各階層に広くみられる。この年代、角屋型家屋が全階層にみられた理由は、10 石以下層の割合が、直屋型家屋の割合よりも大きいために、必然的に生じたのであろう。1800 年代は、直屋型家屋が増加し、(直+2) 型もみられるようになり、直屋型家屋を利用する階層も上層へ広がってゆく。直屋型家屋が 50% をこえた 1851～68 年には、直屋型は中間階層を中心に多くみられ、角屋型家屋は、下層から最上層まで平均してみられた。幕末に、直屋型家屋が中間階層に多くみられたのは、家屋の 2 建て替えがこの階層を中心に行なわれたことを推測させ、その際、直屋型が好んで用いられたためかもしれない。座敷は、各年代とも別棟家屋のある角屋型家屋にみられ、いずれも、村内の最大持高の百姓が所有している。

高持層の家構型と石高階層の関係は次のようにまとめられる。

- 1) 九頭竜川下流の越前北部では、1700 年初頭に角屋型家屋が 20% 程度みられたが、この家構型は中・上層に多くみられた。直屋型家屋は大部分が(直+0) 型で下層に多い家構型であるが、1 部は中・上層にもみられた。

- 2) 角屋型家屋が 50% 前後みられる 1700 年中期以降は、角屋型家屋は ~10 石以上の中・上層で一般的に用いられ、直屋型家屋は下層に限られる。特に、南部の武生地域では、角屋型家屋が 80% にも達し、この傾向は明瞭になる。

- 3) 1800 年代は、一般に、直屋型家屋が増加し、角屋型家屋が減少する。北部の坂井・福井地域は、直屋型家屋のみとなるが、南部の丹生・武生地域は、以然、角屋型家屋が 50% 以上もみられる。しかし、南部では、直屋型家屋は中・上層で増加し、角屋型家屋は、中層で減少し、下層と上層に残存する。

- 4) 各地域・各年代とも、別棟家屋のある家構型は別棟家屋のない家構型より上層で用いられている。

- 5) 「座敷」は、別棟家屋のある家構型のみにもみられ、村内の最大持高層または村方 3 役層が所有している。

〔注〕

(注-1) 「福井県の民家」福井県教育委員会編

(注-2) 「福井県の民家」の (p. 17) によると、角部分を出入口とし、デザイン面でも強調する秋田や山形の中門造となり、越前の角屋型民家は、出入口を必ず主屋に設け、角部分は主屋内部の機能を突出させたもので、デザイン上でも主屋を引き立てる役を果し、主屋に対し従の関係をもっている。

(注-3) 「福井県の民家」では、越前民家を 4 つの型に分類し、本論文の武生地域にあたる地域は、越前 I 型と呼ぶ家屋型のうち、特に、「ツノヤ」(角部分家屋) が発達した越前 I' 型が分布する平野部に相当している。

(注-4) 角屋の「床」については、次論文で詳述する予定である。

(注-5) 「家別入別帳よりみた近世中期以降の越前民家 その1・村落の構成と家屋の呼称」(論文報告集 No. 238) の図 1-6 を参照。

SYNOPSIS

U.D.C. 728.6.03(521.4)

FARMER'S HOUSES OF ECHIZEN AREA, A STUDY OF HOUSE AND FAMILY REGISTRATION BOOKS (IHEBETSU JINBETSU CHŌ)

Part 2 The distribution of the house shapes based on area, period and economic Status.

by HIROYASU YAMADA, Yokohama National University,
Member of A.I.J.

Contents,

- 2-1 The classification and functions of Tsunoya houses.
- 2-2 The distribution of Sugoya houses and Tsunya houses.
- 2-3 The distribution of six types of house complexes.
- 2-4 The relationship between house complex types and economic statuses.